

物流の変遷と流山

江戸時代になると戦乱もなくなり世の中が安定してきます。江戸や大阪などには多くの人々が住むようになります。人、物、カネが集まることにより経済が発展した。それを支えたのが物流です。米や海産物を中心とした食糧、家を建てる木材などが都市部に運ばれた。多くは海路を船で運んだ。関西を中心とした瀬戸内海や日本海の北前船、関西や東北と江戸を結ぶ太平洋海路などです。

しかし、内陸部では道路が狭く舗装もないので馬車は使えず、もっぱら馬の背に積んで運んだ。そうした中、最も頼りになったのが河川を利用して運ぶ舟運です。大型の川船では米俵が800表も運べた。材木は筏に組んで運ぶことができます。徳川幕府の行った利根川の東遷事業で、利根川は銚子に流れる本流と江戸川に流れる支流とに分かれたが、銚子から利根川をさかのぼり関宿から江戸川を下り江戸への河川ルートが開けた。それによって、利根川や江戸川は江戸の経済を支える物流の大動脈になった。今の高速道路の役目を果たしていたのです。また、河川には河岸や渡し場が置かれ、近くには醤油や酒、みりんなどの産業が生まれ、産地と消費地を結び付けていきます。流山を流れる江戸川には米を積んだ高瀬舟や筏が行き交っていました。流山のみりんや酒、醤油も舟で江戸に運ばれました。

しかし、江戸の中期になると利根川の関宿下流に浅瀬ができ航行に不便をきたしたので、布施河岸で陸揚げして馬で加村まで運び、江戸川の船に積み替え江戸に送った。流山は物流の中継地となり地場産業とともに物流の拠点となった。利根川～江戸川間陸送の不便を解消したのが明治23年に完成した利根運河です。ここでも流山は運河によって物流を支えた。

やがて日本も鉄道の時代を迎えます。明治29年に今の常磐線が、明治44年には今の東武野田線が開通し、舟運にとって代わります。鉄道は船に比べ短時間で大量に運べ、河川のないところまで敷設できますから大変便利です。増水の危険もありません。

戦後、復興の時代を迎えるとオリンピックや万国博覧会が開催され、それに伴い高速道路など道路の整備が進みます。日本列島改造論などが後押しした。それに合わせるように自動車の生産が活発化して、物流は車の時代に入ります。自動車は鉄道と違い道路さえあればどこにでも運べます。さらに消費者に直接運ぶ宅配や、個人から個人へ運ぶサービスも生まれました。背景には個人の好みの多様化や消費の変化などがあげられます。それらの需要を満たすには、より早くより安全に運ぶための物流拠点が必要になります。こうして物流の拠点が各地に建設されていきます。

流山にはかつての物流の中心であった江戸川に並行して、日本一の物流拠点が誕生しつつあります。歴史は繰り返すといいますが、江戸川の物流で発展した流山に、新たな物流の拠点が生まれたことは決して偶然ではない。それは物流の拠点になりやすい地域性が昔も今もあるからです。GLP アルファリンク流山は地域に開かれた物流施設として新しい物流を目指しております。

今日は、江戸時代から明治にかけて多くの物流船が行き交った江戸川と、その江戸川にあった河岸や渡し場跡を見ながら、現代の物流拠点を土手の上から眺めていただきます。

平方村新田の渡し(尼谷の渡し)

対岸の平方新田尼谷を結ぶ渡し場。江戸時代の記録はなく、明治13年、陸軍作成の迅速図にもないことから明治後期中野久木河岸(渡し)が移動したと考えられる。一時期は対岸に多くの民家があり活発に活動していたと伝わる。昭和30年代まで運航していた。

中野久木の渡し(吉屋の渡し)

渡し跡の標柱はないが、迅速図には平方村新田との境界近くに記入されている。江戸時代の絵図には中野久木の飛び地が対岸にあり、元文3年の検地帳には河岸があったとある。飛び地は江戸川の直線化工事で生まれたので初めは農作業用の渡し場だった。また小金牧内の木材や炭、薪を積み出す河岸でもあった。吉川市の資料には明治17年、吉川市側5村と流山側の中野久木村、平方村、平方新田村、平方原新田が渡船場開設願を県に申請している。それまでは中野久木の専用の河岸と渡しであった。このことから、明治後期に平方村新田に移動したと考えられる。

上新宿新田の渡し(六兵衛の渡し)

江戸川の直線化工事で対岸に飛び地が生まれた。その農作業用の渡し場だった。東葛飾郡誌によれば明治10年と明治43年に許可されたとあるので、初めは上新宿新田の村内渡しだったが、明治43年、加藤村(吉川市)との本渡しになった。昭和30年代までであった。

南の渡し(半割の渡し)

迅速図にあり明治10年許可になっていることから、江戸時代より対岸の飛び地への農作業用の渡しであった。明治44年、再許可になり半割村(吉川市)との本渡しになった。対岸は水田地帯で冬場は草場がないので、農耕馬は草地のある南村の台地に移され冬を越した。渡し場から台地にかかる坂道を馬坂という。昭和30年代までであった。

今上落とし

享保13年(1728)、江戸川が直線化され、それまで吉川市を流れていた江戸川は現在のようになった。そのため今上村や西深井村、平方村などの農業用水の排水ができなくなった。江戸川の水位の方が高いからである。そこで排水路を作り水位の低い下流の流山村まで伸ばして排水した。これが今上落としとして昭和4年に改修された1級河川。深井新田から6・7km。もとの源流は野田の上花輪だった。

上新宿新田排水場

今上落としの排水場。今は機械化されている。

水神塔(下記の碑文)

高龍神(たかおかみのかみ)	大山祇神(おおやまつみのかみ)	明治四年辛未八月吉日
閻龍神(やみおかみのかみ)	閻山祇神(やみやまつみのかみ)	野田 8人の名

龍神は水神。高は山を指し高龍神は山の水神。京都の貴船神社の御祭神でもある。閻は下の意で谷や河川を指す。閻龍神は谷や川の水神。大山祇神は山全体の神で此花咲夜姫の父。山の水神、農業神として信仰された。閻山祇神は谷や河川の水神。この塔は野田の人が建てたことから、今上落としの排水が悪く、大雨が降ると野田に水害が出た。そこで流山村の上流の上新宿新田に排水場を設け水神を祀ったと考えられる。もとは排水場近くにあったと思われる。明治4年8月は葛飾県の時代。